

## 学生間の相互学習を促すライティングスペースの検討：多人数授業におけるブログ活用の成果と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高口, 涼, 藤井, 基貴 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007787">https://doi.org/10.14945/00007787</a>

## 学生間の相互学習を促すライティングスペースの検討

— 多人数授業におけるブログ活用の成果と課題 —

高口 涼\* 藤井基貴\*\*

Consider of "Writing space" to encourage mutual learning among students:  
Achievements and problems of the use of blog in the large classroom

Ryo Koguchi Motoki Fujii

## Abstract

The purpose of this paper is to clarify how the digitized writing space in education is about to think. It would be a clue when that would lead to encourage mutual learning among students and consider the "Active Learning" in the future. Was organized on a theory practice, in this paper, we show the setting of what I think.

キーワード： ブログ活用 多人数授業 アクティブ・ラーニング ライティングスペース 相互学習

## はじめに

人間は、書くということによって、歴史であれ、報告であれ、情報を記録すること、議事録であれ、書簡であれ、合理的かつ生産的な議論に資することのいずれもがなされてきた。

昨今の教育および学習の場においては、IT 技術の導入が加速度的に進みつつある<sup>1</sup>。市原[2009]のまとめによれば、

… (略) …授業で IT 技術を活用する試みはパーソナルコンピュータ (以下パソコンとする (原文ママ)) が普及した 1990 年代に大いに注目された。そこでの利用は教室に置かれた個別パソコンによるものであった。その後、パソコンがインターネットに常時接続されるようになった 2000 年代以降、ネットワークの機能を活用した新しいタイプの活用、すなわちコミュニケーションを生かした教育活動への利用が現実化されるようになった<sup>2</sup>

と、IT 技術の導入の変遷が述べられている。IT 技術と付き合い生きていくこと、その活用方法を学ぶことは現在の教育および学習活動において必要不可欠な要素となっていることがいえる。したがって、教育や学習の際に IT 技術をどのように使うのかということは、

授業デザインを考える上でも大きなテーマとなる。

元来、教育や学習の場における情報技術のツールは ICT と総称される。ICT とは、「Information and Communication Technology」のことで、情報コミュニケーション技術を指す。材料収集はもちろんのこと、それを取捨選択する、まとめることや、他者との議論にも用いることができるであろう。また、自らが現在のどの程度まで知見を得ているか、アウトプット可能であるかということを示す手段としても用いることができる。さらに、アウトプットを如何にするかということも ICT 活用の一環となる。

大学授業における ICT 活用の研究は、大学教育改革として、特に視聴覚教材をいかに用いるか、という問題意識と、1997 年に大学設置基準が改訂されたことにより制度化された遠隔地教育との関連で注目されてきた<sup>3</sup>。

さらに、2003年度、文科省の「教育GP」の頃には、ICT活用に関しては、遠隔教育などの教育機会の拡大の文脈で語られていたものから、教育効果の向上をはじめとする「教育の質保証」の文脈へと変化してきている。つまり、学士課程での質の中での議論として学修支援環境TAなど教育サポートスタッフの充実、ICTを活用した双方向型の授業や教学システムの整備、学生に対する経済的支援、学生の主体的な学びのベースとなる図書館の機能強化等) と併せて論じられるようになったのである。

大学教育におけるこうしたICT活用の議論の変化を鑑みて、本稿では、教育の場においてデジタル化された書記空間を「ライティングスペース」として意味づ

\*静岡大学大学院

\*\*静岡大学教育学部

けなおし、その内容および特質の分析を進めることを目的としている。研究対象については、静岡大学教育学部科目にて、開講されている「道徳指導論」（著者の一人である藤井基貴）の実践<sup>4</sup>、とりわけブログを用いた課題提示とその応答を講義内において行うという実践に注目し、それを手がかりにブログを用いた課題提示と学生がブログに課題を書き込むという方法を、学生の学習・研究を支えるICT活用を取り入れたアクティブ・ラーニングの成果としてとらえ、同ライティングスペースの分析を（3）で行う。そのため（1）および（2）についてはその前提となる、大学教育改革における質保証の議論と「書くこと」との関わりについて論じる。

### 1. 大学教育の質とアクティブ・ラーニング

文部科学省が、「大学教育改革実行プラン」（2012年6月5日）を公表し、中央教育審議会は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（2012年8月28日）を答申し、また、同日に「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」の諮問を受けているところである。「大学改革実行プラン」では、「大学教育の質的転換」が唱われており、学修時間の実質的な増加・確保により、①「答えのない問題」を発見、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること、②実習や体験活動などの教育によって知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けること、が求められている。

中央教育審議会（以下、中教審）で議論されているように、大学のステークホルダーである社会が、学士課程教育改善の現在の到達点に満足していないという視点を基礎としており、学生に対しては、高校までの受け身の勉強とは質的に異なる主体的な学びのための学生の学修時間が少ないという大きな問題があるとしている。

本来の制度設計では、「大学制度において、1単位は予習や復習などの自学を含めて45時間の学修を要する内容で構成することが標準とされている。これは学びの主体性という大学における学修の本質に基づく仕組みであり、体系的なカリキュラムに不可分に連動するものである<sup>5</sup>」とされている。

上記の問題意識と制度設計を踏まえて、高等教育の課題が学生数等の「量」から教育の「質」へと転換するユニバーサル段階において、また、我が国が激しさを増す社会変化に直面する中で生き抜くことをできる学生養成をしようと、学士課程教育の質的転換への早急かつ効果的な取組が求められている。

こうした議論がさらに洗練され、大学教育がより学生指向となり、学修しやすく、成長できる環境が整備

されていくことは、基本的に望ましいことである。

アクティブ・ラーニングについてであるが、アクティブ・ラーニングは、文科省の資料によると<sup>6</sup>、

「伝統的な教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を行うことでも取り入れられる」

とある。つまり、インプットからアウトプットへと至る一連の流れを枠付けする教授法であると理解することができる。具体的に述べると、資料やデータ、映像や情報を多様なツールから取り入れ、その取り入れたものの中から何を選択して、どのような課題設定をするかということが重要になる。その後、その設定した課題を踏まえて、比較、分析、批評、判断、整理を含めた批判的検討を行い、最終的にアウトプットへと至る。こうした一連の流れを学習者自身が型を求め、構築しつつ行っていくのである。そうしたアクティブ・ラーニングを行っていく中で、個別学習のみでは比較、分析、批評、判断、整理を含めた批判的検討を行い、最終的にアウトプットへと至るということは必ずしも完結できるとはいえず、他者と協同して学習していくことが必要になってくる。また、学修における内容に関する必要性を説かれて知るのではなく、自らの経験から必要性を感じ取っていくことができる。自分でやること、できることと、他者がやっていること、やることのできることを議論等を通じて連携させ、どのようにまとめていくかを重視しているのである。従って、知見を収集し、自分で問いを立て、構成を決め、収集した材料の批判的検討と他者との議論、連携を経て得られる理論に至るという一連の研究のサイクルを、各自が自らの力によって発見することがアクティブ・ラーニングである。さらに述べると、自分自身のアウトプットを生産することが求められるというところに、積極的な授業への参加が求められるのである。

近年は、学生が大学で学習や学修<sup>7</sup>したことをどのように生かすのかということに非常に重心を置いて議論がなされている。それは、「質保証」や「質転換」をキーワードとして、大学教育改革の流れの中に位置づけられてきたことがいえる。大学教育は、学問のリテラシーを養成すること場であると解釈しても前段落

までに述べてきたことと相違しないだろう。学問のリテラシーは言い換えると、学問の見巧者、聞き巧者といってもよい。学問の見巧者、聞き巧者を養成するという視点を取り入れることで、質は具体的に何をさすかということが見えてくると考えられる。

見巧者とは、演劇や芝居に通じていて、見方の上手な人のことを指し、聞巧者は、聞き上手のことを指す。その意味から分かるように、この語は広く演劇や芝居の世界で用いられてきた語である。

現行教育基本法では、第七条第一項において、大学は「学術の中心」であるという理念を示し、この理念を踏まえて「高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するもの」であると規定されている。いうまでもなく学術の本質は真理の探究であり、この学術の理念を根拠とした大学教育は、需要と供給関係にある教育サービスの提供のことではない。

さらに第二項では、大学について「自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない」としている。「学術の中心」であるということは、学術の知の拠点として社会から一定の距離を保ちつつ、距離感を保ち、社会の批評および提言をすることを意味するものである。

「学術の中心」としての大学の本質は、学習者に対して、学問を批判的に検討できる学習者を育成できることが求められている。その方法がこれからにおいても議論されることは必要なことである。学習者の育成において、アクティブ・ラーニングが用いられ、学習者自らが学術を自らの頭に描くことができ、学問の良き批評者となるということ、良き批評者を輩出することが大学教育の質を決める。

学習者が大学を出た後にも、自らが得た知見や仲間を手がかりにして、学問を大学の外から批評し続けられることがこれから求められてゆく<sup>8</sup>。こうした、目的の基に、多くの学習者の意見が集約される手法での課題提示とその意見交流の場が整備されることは望ましいことである。

## 2. 書くということについて

書くということを考察するにあたり、一つの入り口を示す。

……苦悩の詩は、同時に苦悩そのものであり、また苦悩以外の他のものである。実存主義の語彙を適用すれば、詩と諸君はいうかもしれない。ま

さにしかり、彼はそれをつくる、彼は想像の家を画布の上に創造するので、家の記号を創造する

のではない。そしてこのように出現した家は、現実の家のあらゆるあいまいさを具えている。作家は諸君を導くことができる。たとえば、あばら屋を描写して、それを社会的不正の象徴とし、諸君の怒りを喚起することができる。しかし画家はだまっている。(傍点原文ママ)<sup>9</sup>

サルトルは、この引用のすぐ後の部分で、「誰が覚えて画家または音楽家にはっきりした社会的立場をもとめるだろうか<sup>10</sup>」と指摘している。文章を書くということは、書き手である作者・筆者に明確な立場が求められる。その立ち位置から、何らかの事柄に光をあてることなのである。その光、つまり、文章には読み手を時として扇動し、時として導きを与える効果がある<sup>11</sup>。

書くということがすなわち行動であることがアクチュアルであると示せる。そのものの存在、社会事象を記号ととらえ、書き手はその記号を言葉として記す。ありのままの物質性、記号は自覚的に意識して用いているその対自を弁証法的に即かつ対自的に記しているのである。ここに、書くということの存在が求められる。学習者がその場にいることを示し、思考していることを示す手段として書くという行為がなされるのである。そうして、書かれたものは、学習しているという行動である。この行動が広く共有されることで、他者との切磋琢磨や、議論、自己の省察、を促すことにつながるのではないかと考えられる。

学習において書くということは次の段階を経ている。ものを読むことによって考える意欲が湧いてくる。講義はその読むということの道標を示すことができるにすぎない。何も読まずして、考えることなどはできない。無から考察という有は生まれないのである。考えることはその場に自らが存在していることを示そうとする試みであり、この世界に生きている自分を表現することである。書く意欲は考えることによって湧いてくる。書いて示さなければ、考えたことにはならないし、自らの存在を示すことはできない。であるから、「コメント欄の記述の内容が特定の水準に達したと見なされなければ、欠席と同様の扱いをする」という捉え方が成り立ちえるのである。考えることと書くことは循環する。

4において具体的な検討は述べることにするが、書かれたものを、読み取り、汲み上げ、応答することは、書くことの訓練を促進させる有効な手段である。「書き手」である学習者の存在を認め、明確化させ、学習の深化を促す。これまでは、多くこうした手続きを紙媒体によって行っていた。紙に書くということは、用紙と筆記用具を前にした自己との対話を強く促す装置として有効であると考えられる反面、紙媒体で行うこ

との欠点は、多人数授業においては、授業者対学生の構図のみでのやり取りに終始しがちであるということである。従って、応答は特定の書かれたもののみとなり、さらに、特定の応答によって得られた情報しか得ることが学生にはできない。

ICT 活用、とりわけブログを用いた授業課題の提示は、学生の考えをそのまま閲覧することができる。場合によっては、既に提出された学生の課題を受けて別の学生がさらに記述をするということができるし、実際に行われていた。ここで為された内容をさらに受けて、応答するということは、学生間の相互学習を促す授業課題の提示とその課題および内容理解の深化に大いに寄与する方法であると考えられる。

### 3. ライティングスペースとしての blog

J. D. ボルダーが『ライティング スペース』を出版したのは、1991 年のことである（日本語翻訳版の出版は 1994 年）。ここでは、コンピュータによる電子的エクリチュールの可能性について論じられている。ボルダーは結論として、

電子ライティングの世界には、万人必読のテキストというものはない。テキストがあつて、或るものは多くの読者が、又或るものは少数の読者が、詳細に検討したりしなかったりする、ただそれだけのことだ。偉大で、避けて通ることが許されないような書物というものは、印刷時代に属するのである。そして印刷時代は今や過ぎ去りつつあるのだ<sup>12</sup>。

と述べている。コンピュータが印刷書籍に単に取って代わるものではなく、読み書きされることの質そのものが変容している。ということを描き出している。

もう一方で、「ライティングスペース」としての ICT 活用について、学生間の相互学習を促すライティングスペースの構築を考察する。ここでは、電子テキスト論としてではなく、書き読まれる空間のデジタル的な構成をいかに思考するか、というところに関心を寄せた論を展開する。具体的には、人は書く時、書かれるものいかに規定されるか。人は読む時、読むものいかに規定されるかということである。

90 年代後半になされた教育とコンピュータの議論に目を向けてみると、佐伯[1997]をはじめとしたものがみられ、この頃のコンピュータと教育は、コンピュータを導入することに対して必ずしも否定されることではないが、導入することで、知を代行されてしまい、基礎学力が低下してしまうのではないかと、いった懸念が残っていた。つまり、便利で使いやすい

道具を用いるということが、学修の支援となることが直結されるとはいえず、むしろ、便利で使いやすい道具に頼ってしまうことで頭を使う機会を失いかねないということである。

一人ひとりの個人が、個人のみで完結する学習においては、先に挙げられているような懸念が残っていると考える。しかし、学生間において相互に能力を高め合う、という視点で考察してみると、基礎学力の低下ということが結びつけられるものではない。それは、相互に学習を促し高め合うということは、持ちうる知は人それぞれ異なっており、互いが持ちうる知を持ち寄り、その中から検討、議論がなされるという、相互に学習することを通じてより高次の知が構成されると考えられる。

今回の blog を用いたことと関連させてみると、今回の blog は、学生個々の知を集積させる、という点では効果があったということができる。また、既にコメントされたものを参照してさらに付け足しや、踏まえた上で課題のテーマを考察することができるツールとして紙に書き込むということと比較して成果があったと考えられる。

また、一度課題を持ち帰り、考えることで、思考の深化が期待できる。

その反面で、blog のリスクとして、講義受講学生以外も閲覧できることから、荒らされる可能性や、それを考慮しすぎてしまうと、課題提示の際に、より講義に踏み込んだ提示が難しくなってしまう。しかし、パスワードを導入するといったセキュリティ面を重視しすぎると、アクセシビリティが低下してしまう懸念があり、オープンにするということとセキュリティとの按配がこれからの課題となる<sup>12</sup>。

本節のはじめに引用したボルダーの結論のとおり、学生間の相互学習を促す課題提示は「テキストがあつて、或るものは多くの読者が、又或るものは少数の読者が、詳細に検討したりしなかったりする、ただそれだけのこと」である。多人数授業において、知が集積され、検討、議論がなされるこうした環境はこれからの学習形態に一石を投じたものであるといえ、これからより詳細に今日議論されている大学教育改革の流れと関連づけて論じる必要がある。具体的には、主体的に学ぶ姿勢を持たせやすいアクティブ・ラーニングの手法として blog を用いることは、blog 開設の手間はあつたが、一度開設することで、半期にわたって用いることができ、削除しなければ、授業後も blog を参照することができる。

自学自習を完全に学習者に任せてしまうのではなく、授業者側の仕掛けとして課題提示があり、その課題提示を受けて、学習者自身が考察し、持ちうる知を持ち寄って、課題に取り組んでいくという流れが blog を用いることで成立する。さらに、blog において展開

された取り組みの蓄積を講義の場で取り上げることで、授業者と相互にやりとりをすることも成立する。

ホルダーの述べるように、「電子のテキストが世界であるとすると、それは常に動きつつある世界であろう<sup>14</sup>」し、また「コンピュータのテキストは決して静的なものではないし、また読者がそれに与える様々に変わるコンテキストからかけはなれたものでもない<sup>15</sup>」のである。書くということによって、考えていることを示すとともに、コンピュータ空間においては、知の集積に寄与している。それを読み返すことで、自らの考察過程が視覚的に分かる。

blogをはじめとする、コンピュータ上での記述空間には、対話可能性が保持されており、知を持ち寄り、集積するということと、自己の考察を視覚的に明確にできるという2つの側面が見られる。

今回の実践では、課題としてある事柄について調べたこと、考えたことを問うものや、実際の教材を授業内で提示し、その先の発問を考える課題、教材そのものの取り扱いの是非を問い、考察させる課題、グループで討議、検討し、意見をまとめ、その結果を報告する形式で提示した課題、それぞれの学生の背景を知る手がかりとなる課題の提示をした。

授業内において、その場で問われ、答えることとは異なり、一度持ち帰って、じっくり考えて課題に取り組んだり、他者の意見を見た上で、それを受けて自身ならどのように答えるかを組み立てたりしている様子が、課題提出から窺うことができた。

また、大学における学生の学びについて研究した長橋・花井[2012]によれば、「S 大学教育学部学生は、大学生活を通し、個人で努力し力をつけたというよりはむしろ、仲間と切磋琢磨していくことによって力をつけたと感じていること<sup>16</sup>」と指摘しており、端的に示すことのできる視点として、本稿で取り上げる実践が、仲間と切磋琢磨して力をより伸ばすために、互いの考えを知りうることに寄与しているものとも考えられる。つまり、課題提示から課題提出までをブログ上で行うことで、受講者の思考が受講者に共有できるものとなる。

本年度用いたブログは、過年度同様に、ウェブ上に残しておく予定である。ここから振り返りの手がかりを得て考察を行うことのできる環境をさしあたり整えることができていることは成果である。

#### 4. 学習メディエーターとしての TA

筆者は、ティーチングアシスタント（以下、TA）として「道徳指導論」（著者の一人である藤井基貴が担当）に参加した。同科目では、講義の課題提出、即ち学部学生（以下、受講生）の考察した内容に TA が応答していく仕組みが取り入れられた。これらは、担当教員のみが通常行っていた応答に TA も加わることに

より、TA 自身が「読み手」と「学習者」の行き来がなされることとなった。

実際には、冒頭 10 分以内の持ち時間を用いて筆者は TA という立場<sup>17</sup>で応答を試みた。また、応答に際しては、A4 サイズ 1 枚の資料を作成<sup>18</sup>し、配布した。

TA として参加することを通して考察した教授能力開発について示す。

今回、担当教員と担うこととなった受講生に応答するという行為は、提出された課題の読み込みに根付くものであり、ここから何を読み取り、どのように応答するかということが問われていた。それはつまり、課題を提出した受講生の存在を如何様にとらえたか、応答に際しては、TA という立場からどのように応答するかについて、単に内容のまとめや感想を述べるだけではなく、受講生がより学習を深化することができるように配慮することが問われていた。こうした機会は自身の活動を省察する機会が得られるとともに、担当教員からの助言は、筆者がどのように見られているかを客観視することにもなった。つまり、こうした手続きを経ることにより、TA 自身が「読み手」と「学習者」の行き来をしていたということになる。

こうした活動は、応答が受講生への学習を深化させる教授行為の一環であることがいえる。TA を通じて、自己の活動の省察、課題の読み込みから実際の教授行為へと結びつける作業は、実践としての訓練となった。

提出された課題を読み込むことは根気を要する。よき「読み手」とならなければ、課題提出者の意図を汲み取ることができない。汲み取らなければ応答することもできない。よき「読み手」となるには、読み方の多様さ、視点が要求される。よき「読み手」となる訓練ができる、しかも担当教員の助言付きであることは、TA の教授能力開発におおいに寄与するものであると考えられる。

#### おわりに

本論文では、大学での多人数授業とりわけ学部専門科目で、2012 年度において著者の一人である藤井基貴が展開されている「道徳指導論」の実践方法の紹介（取扱い事例の紹介）と分析を通して、多人数授業における ICT 活用を活用した「アクティブ・ラーニング」および「ライティングスペース」構築の成果と課題について検討してきた。

書くということについては、「ライティングスペース」としての ICT 活用について、学生間の相互学習を促す授業課題の提示を考察した。

本稿は、先行研究で確認されてきたことを改めて確認したにすぎない部分もある。他方で、以下二点については、本稿の新たな見解として示すことができたと考えている。

第一は、書くということが改めて何を意味している

かである。

ブログを用いた授業デザインに関しては、直接にブログを用いた実践や方法としてこれまでは論じられてきたことが、中島・豊福[2009]や向後[2005]から見る事ができる。また、ブログは濱康・森広・正司・永田・掛川[2006]の研究にも見られるように、情報発信の道具として用いるということと、永田・森広・鈴木[2005]の研究にも見られるように、ティーチング・ポートフォリオの利用に関する研究が進められてきた。

本稿では、ブログを用いた実践の検討という面では新規性は多くを見られないかもしれない。しかしながら、デジタル空間における「ライティングスペース」の構築という観点から、書くということを概念的に突き詰めていったときに、改めてそれは哲学における存在論への志向を呼び覚ますものとして描きなおすことができたと考えている。つまり、ブログ上に課題をコメントし提出するというのが、存在の問題、こと「ここに私はいる」ということの現れとして、逃げも隠れもできないありのままの個人の存在の在り方を見ることができるのである。書くということ自体が、ポートフォリオとしての目に見える形での蓄積というよりも、書くということは、書き手がその場に存在しているということを示す行為であった。そういった意味で、本論文は方法論や実践の在り方について論じられてきた ICT の活用の研究に対して、原理的な追求を行ったささやかな成果でもある。

また第二に、大学で学習するということと、書くということ、さらにそれらが、いかにして結びつき、考えられるかということである。

学生間の相互学習を促すこと、また、相互学習を促す場を作り出すということは、対話を求め、デザインするということであり、これは、学問が誰のものでもなく、すべての人のものであることを保証している。そして、その思考はそこに私がいて考えているという存在のためのものであるということに通じている。これは、提示された課題は、思考が練り上げられ、深化していくことを通じて学生相互につながるということと目の前にある課題と考える自分がつながっているということなのである。

学生間の相互学習を促すライティングスペースの構築は、とりわけ、教育学部学生に対しての、という視点で示すと、実践と理論の往還の限界を定めたところからの始まりが示されるようにならなければならないというところが、課題となるであろう。

最後に、だがしかし、こうしたアクティブ・ラーニングや ICT 活用の有用性を認めることとしても、「コミュニケーション能力」について触れることなく、コミュニケーション能力が育成できる方法である、他者との協同学習が可能となる、という結論に至るかどう

かについては、それらを行う環境、具体的には机の配置や実施場所、についての指摘がまだまだ足りないということもでき、端的に判断してしまうことは、実践の段階において、アクティブ・ラーニングや ICT 活用の目的や効果を歪めることにもなりかねず、慎重な検討が求められる。本稿の課題は、他者と練り上げていく知のツールとして確認してきた ICT 利用の成果を踏まえ、コミュニケーションという視点を取り入れ、ライティングスペース構築の展開について考察していくことであろう。

#### 参考文献

- 東浩紀『一般意思 2.0』、講談社、2011
- 市原信「大学授業におけるコミュニケーションについて」、『東京家政学院大学紀要』第 47 号、2007
- 市原信「大学授業におけるコミュニケーションについて その 3」、『東京家政学院大学紀要』第 49 号、2009
- 京都大学高等教育開発推進センター編『生成する大学教育学』、ナカニシヤ出版、2012
- 向後千春「講義型授業の補完としてのグループブログの利用に関する予備的調査」、『研究報告集 JSET 05-4』、2005
- 斎藤里美、杉山憲司(編著)『大学教育と質保証』、明石書店、2009
- 佐伯胖『コンピュータと教育』、岩波書店、1986
- 佐伯胖『新・コンピュータと教育』、岩波書店、1997
- 中島進、豊福晋平「ブログによる理科実験レポート作成有効性について」、『研究報告集 JSET 09-3』、2009
- 永田智子、森広浩一郎、鈴木真理子「デジタル・ティーチング・ポートフォリオとしてのブログの可能性」、『日本教育工学会論文誌29巻増刊号』、2006
- 長橋綾乃・花井信「教育学部学生の学びの現状」『静岡大学教育学部附属実践総合センター紀要』、静岡大学教育学部附属実践センター編、No. 20、2012
- 濱康裕、森広浩一郎、正司和彦、永田亮、掛川淳一「教科情報におけるブログを利用した情報発信の授業実践」、『第21回日本教育工学会大会講演論文集』、2005
- J.D. ボルダー(黒崎、伊古田、下野訳)『ライティングスペース』、産業図書、1994
- J.P. サルトル(加藤、白井、海老坂訳)『文学とは何か』、人文書院、1998

註

<sup>1</sup> 導入されているのは学校だけではない。学生、児童生徒一人1台の時代である。初等・中等教育における導入例は「デジタル教科書」の導入からも時代の趨勢であることがわかる。また、学生に関しての顕著な事例は名古屋商科大学の取り組みがある（「パソコン無償譲渡制度」<http://www.nucba.ac.jp/support/it-education/it.html>（2013年1月25日閲覧））。

<sup>2</sup> 市原[2009]、p.1

<sup>3</sup> 本稿で考察することとなる、デジタル化された書記空間についても、電子メールのやりとりや電子掲示板を用いた遠隔地教育の支援に関わったものが多く、これらの研究の知見を享受している。

<sup>4</sup> 本稿で手がかりにする実践の概要は以下の通り。

(1) 科目の位置づけ

「道徳指導論」は①教育学部学校教育教員養成過程の、②「教職に関する科目」に、③4年次の必修科目として設置されている。

(2) 受講登録者

受講者はあらかじめ専攻専修ごとにクラス分けがなされており、基本的には決められたクラスで受講することになる。本年度の初期登録者数は、教育実践学、教育心理学、幼児教育学、特別支援教育、家庭科教育、英語教育を主とする107名であった。クラス分け、授業登録に関する手続きに関する情報は、

<http://www.ed.shizuoka.ac.jp/stufac/student/>（2012年12月27日閲覧）及び学生便覧を参照した。

(3) 用いたブログについて

gooブログ（無料）を用い、「成長する道徳くん2012」として開設した。本ブログを用いた理由は、無料であること、前年度までの実践においても同サイトのブログを用いて開設されていた故である。初回講義において、オリエンテーションワークと関連させて、ブログ投稿時に用いる番号を学生に配布し、学生は課題提出時にはその配布された番号を用いて投稿するという形式をとった。

応答については、そのブログを閲覧し、資料を作成、担当教員と検討の上、双方が次回講義冒頭で応答するという手続きをとった。

<sup>5</sup> 「大学教育部会の審議のまとめについて（素案）」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyoo4/015/attach/1318247.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyoo4/015/attach/1318247.htm)（2012年12月27日閲覧）

<sup>6</sup> 「予測困難な時代において 生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ大学へ（中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ（案）用語集」

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/giji/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319067\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319067_2.pdf)

（2012年12月27日閲覧）のことである。また、直後の引用も、ここからの引用である。

<sup>7</sup> 学習と学修をどのように使い分けるのか。身につけ

たかどうかを指標とする見方（山上浩二郎「教育の質向上は学修時間の増加から」、朝日デジタル

（<http://www.asahi.com/edu/university/toretate/TKY201203080554.html#Profile>（2013年1月25日閲覧））もあるが、本稿では、学問を修める、単位修得を直接意味する活動については学修を、主に経験を通じた活動により知識を得ることを学習と表記する。

<sup>8</sup> 小林正夫「地域連携型の大学教育とその展開」、斎藤・杉山[2009]所収をもとに筆者が「学習者が大学を出た後も、自らが得た知見や仲間を手がかりにして、学問を大学の外から批評し続けられることがこれから求められてゆく」と結論づけた。なぜならば、どの研究分野と、または、誰と連携するのかという選択は、学問が適切に批評できるからこそできることであると考えられるからである。

<sup>9</sup> J.P.サルトル（加藤、白井、海老坂訳）『文学とは何か』、人文書院、1998、p.18

<sup>10</sup> 上掲書、p.19

<sup>11</sup> しかしながら、絵画や音楽にはこのようなことが必ずしも求められるものではない。文章を書くということは即ち行動を意味する。他者に対して、思想的に影響力を行使している。と解することができる。確かに、本文で引用されているサルトルの論考はこと文学における表現行為について考察されたものである。しかしながら、本稿において、書くという表現行為を考察するにあたり、サルトルの引用は、本稿の入り口として有益な示唆をもたらすものであると考えられる。無論、ここでの目的が文学、芸術における表現行為を考察することではないので、これ以上の作品に関して書くということの考察には立ち入らず、作品と書くということに関連した考察は稿を改めて論ずることとした。

<sup>12</sup> J.D.ボルダー（黒崎、伊古田、下野訳）『ライティング スペース』、産業図書、1994、p.426

<sup>13</sup> 市原[2007]のような、ブログと授業をタイムラグなしにリアルタイムに情報共有を試みる利用方法も研究されている。この市原の試みの際に用いられたブログは、パスワード認証を行い、履修生のみがアクセス可能とするものであった。科目履修者等の条件が本稿において取り扱った試みとは異なるので一概に比較はできないが、オープンにすることと、セキュリティの按配については要検討である。

<sup>14</sup> 前掲書、p.272

<sup>15</sup> 前掲書、p.273

<sup>16</sup> 長橋・花井[2012]、p.176

<sup>17</sup> TAの立場については、静岡大学大学教育センターが発行している『ティーチングアシスタントの心得・FAQ』に示されており、そこでは、「教室の中では、TAも教員として見られていることに注意する必要がある

---

あります」とある。

<sup>18</sup> 応答の際に配布した印刷資料は、高口が作成し、もう一人の著者であり、担当教員でもある藤井と内容の検討を行い、配布するという手続きをとった。